

今月のみことば 2015年12月



「キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみことばによったのです。」

(ガラテヤ人への手紙1章4節)

パリでの同時多発テロは世界を震撼させ、世界のどこにも本当に安全な場所はないことを改めて思い知らせた。たった一夜の出来事で、治安が一挙に不安定になり、経済が冷え込み、人々が互いに疑心暗鬼になったことで、イスラム系テロ組織 IS は快哉を叫んでいることであろう。彼らの悪魔的目論見は大成功を収めたのである。

イスラムの聖典『コーラン』に「一人の人間を殺すことは人類を殺すこと。一人の人間を救うのは人類を救うこと」という有名なことばがある（「食卓の章」5:32）。イスラム教が本来は平和の宗教であり、テロを容認してはいない根拠としてよく引用される箇所である。

ところが前後関係を見てみると、その教えは神がイスラエル、つまりユダヤ人に従うように命じたもので、次節を見ると、「アラーや預言者ムハンマド（マホメット）に戦いを挑む者」は、十字架につけるか、殺害するか、手足を切断するか、国外追放すべきである、と書かれているのであるが、この点がふれられることはまずない。

私たちにとってこのような現実を見つめることはつらいことである。誰もが人間の善性を信じたい、とどこかで願っているのではないだろうか。『アンネの日記』で有名なユダヤ人少女、アンネ・フランクも「じっさい自分でも不思議なのは、わたしがいまだに理想のすべてを捨て去ってはいないという事実です。（中略）いまでも信じているからです。—たとえいやなことばかりでも、人間の本性はやっぱり善なのだということを」（1944年7月15日）と述べ、世界に感動を与えた。そして実際に、イスラム教徒と言われる人々の大多数が、親しみやすく人情豊かな人々であることに疑いはない。



しかし、問題が深刻なのは、「善人」と思われた人が、何かのきっかけでおぞましい犯罪に手を染める人になる、という事実もまたあまりに多い、ということである。ユダヤ人大量虐殺の推進者であったアドルフ・アイヒマンも、「悪の権化」などではなく、実はどこにでもいそうな「思考の欠如した凡庸な官僚」にすぎなかったという報告は衝撃的で、著者ハンナ・アーレントは多くのユダヤ人からの激しい非難の嵐に遭うこととなった。テロやホロコーストに関わる人間は、特別な悪人であり、自分とは違う、と誰もが思いたいのである。

しかし、実は、私たちの誰もが、もし神の恵みがなければ、どのような悪をも犯しかねないあやうい存在であることを聖書は語っている。

キリストはこのような私たちの現実の罪の世に来てくださった。それこそは私たちが真に喜べることではないだろうか。救い主キリストの誕生を心から祝いたいものである。